日本モンゴル文学会・2024 年度秋季大会・報告要旨

近代内モンゴルと日本の邂逅
―ロブサンチョイダンごと羅子珍の来日経緯をめぐって―

サラントヤ
（東京大学大学院総合文化研究科・大学院博士課程満期退学）

本報告で、『Mongγul−un ǰang aγali−yin oilburi』（『蒙古風俗鑒』、以下『oilburi』と略する）の著者で知られるロブサンチョイダンごと羅子珍（以下羅子珍のみにする）の経歴を日本との人的ネットワークの中で再検討を試みる。

従来、『oilburi』を手掛かりとする民俗学的研究の蓄積はあるが、人物研究の点で未だに多くの課題が残されていると言えよう。具体的に『oilburi』のテキストを独立した空間としてみなし、それを書かれた歴史的環境から切り離して考察する傾向があり、羅子珍の北京・日本・大連といった幅広い活動の背景について、突っ込んだ実証的な検討がなされていない。

羅子珍がごく普通の僧侶から一人の近代的知識人として「変身」できた背景には、日本との出会いが大きな影響を与えたと報告者は考える。彼は「陰差陽錯」にして雍和宮にたどり着き、その後八カ国連合軍が北京を占領した際、雍和宮保護のために奔走するなかで日本人と接触し、「混乱の中の出会い」に恵まれた。大陸浪人川島浪速や仏教界の要人大谷光瑞・寺本婉雅らとこの時に縁を結んだ。こうした人脈が、彼の二回に渡ってモンゴル語の教師として来日することに繋がった。また、東京外国語学校の教え子に若きごろの折口信夫もいたことは、羅子珍の『oilburi』の執筆に何らかの影響があったに違いないだろう。そして帰国後の羅子珍は、南満鉄株会社に就職し、日本人との付き合いがさらに続いた。

以上は羅子珍の経歴の概況だが、彼に関する資料と言えば、実は非常に断片的で、関連の資料を調べても彼の経歴を確定するには大きな困難に直面する。また彼の自伝的記述にも、彼が関わったと思われる諸事件について、具体的な情報がほとんど残されていない。特に日本と関わりについて、彼自身が積極的に語ろうとしていないようにも感じられる

報告者は、近年こうした断片的な資料から着手し、羅子珍の足跡を追って行く中で、多くの人物や歴史事件との繋がりが浮き彫りになり、20 世紀初頭の内モンゴルを取り巻く諸勢力の動向をより深く把握するには大きな啓発的切り口になることを感じる。つまり、報告者の羅子珍研究は、個人を通して歴史のある實相を明らかにするというよりもその個人の生涯や思想が歴史を超えて訴える価値を探求するものである。

（以上）